

# 生活学講義ノート(その一)

山本 順子

## 目次

はしがき

### 第一章

名称からのアプローチ

―家政学の名称

―生活学とその名称

### 第二章

生活学 ―研究者の研究足跡から

#### 第一節

生活は日常性に於て問題とされなければならない

―高野岩三郎―

―永野 順造―

#### 第二節

生活とは何ぞやという設問から発することをやめよう

―留岡清男・生活教育論―

### 第三章

豊かな生活よりも正しい生活を

―E・スワロー―

―優境学・エコロジー―

―手先の訓練・身体的教育の重要性

### 第四章

生活学の課題

―労働力再生産論からの止揚

(以下そのIIにつづく)

本稿のむすび

## 生活学講義ノート

はしがき

一九八九年、北星女子短期大学家政学科は、その名称を生活教養学科と改称した。学科の名称変更はコースの増設、カリキュラムの変更を伴うものであった。そのなかで、私が担当してきた「家政学原論」が「生活学概論」と変わった。新しい「生活学概論」は生活教養学科の必修科目である。私はその講義概要（シラバス）にこう記している。

「私たち人間が生きるためには、食べものや多くの生活財を得、かつ管理していかなければならない。何を、どれだけ、どのように、のなかで、自然や社会と大きくかかわってくる。また、私たち人間が生活するために作り上げてきた社会のなかで、時間や空間や人間関係や規範とのかかわりを大きく持つようになった。さらには、生活史のなかで限りなく精神生活の創造性を高めてきた。

その歴史的経過をあとづけ、現代の生活問題の諸側面を解析していきたい。

- 1、生活学をどう学ぶか
- 2、ひとはどのように暮らしてきたか
- 3、家族の成り立ちと変化
- 4、現代の生活構造
- 5、生活保障の体系
- 6、生活の質を考える

生活教養学科の必修科目であるとともに本講義は、学科のカリキュラム展開の中でそのケルンとしても位置づ

けられている。

即ち学科紹介に次のようにある。

「：現代における生活が多様な側面を持つていることに対応し……家庭を生活の場としての家庭としてとらえる観点とともに、社会的、文化的な視野からもより総合的にとらえることを目標として、コースおよびカリキュラムが構成されている。一年目においては、生活にかかわる基礎的な事がらを衣・食・住・人間関係など多様な観点から学び、生活学概論による総合をはかることを教育目標としている。」（傍点筆者）

以上から、それだけに単に講義名の変化にとどまらず講義の構成、展開は難問であった。いや今なお自問自答の繰り返しが続いている。しかし今や「経済の時代」から「生活者の時代」への移行は必至であり、「生活とは何か」を問う生活学の体系化そして生活課題を探ることは今活き活きとした問題として前面に据えられている。

ここに紀要論文執筆の機会をえて、これまでの講義展開の経過過程をも踏まえ、私の「生活学」講義の試みの一端を紹介したい。

## 第一章 名称からのアプローチ

### 一 家政学の名称

まことにプリミティブな問題なのだが、いま、「生活学」を英語で現わしたらどうなるだろう。この問いに入る前に私は以前の「家政学原論」の講義のさいに「家政学とは？」の問いに対してまづ「名称からのアプローチ」をとり上げている。家政学は日本にあっては、戦前には「家事学」「家事・家政の学」と称されていた。それはまさに、B・R・アンドリュースのいう「内部家政」Internal Household economics に当たる。又 準戦時体制、戦時体制下にはいると、倉澤剛のいう「皇国家政学」つまり「富国強兵」のための家政でありそれまでの「市民家政」が否定されるに至った。やがて第二次世界大戦の終えんと共に家政学は時代の変化に即して彩りを

加えてゆく。曰く「家庭経営学」「生活経営学」「生活管理学」「生活科学」等々。そして明白なことは家庭・家族・世帯・そして生活の変化・変貌・なかなづく生活の社会化に即応しての名称の変化であった。それは前述のB・Rアンドリュースのいう「外部家政学」external household economicsの範疇での称であった。ここに至って家庭生活は時には経済主体として、更に経営体(Business Enterprise)として性格づけられるようになった。

また一方、英・独語においてはどうかであろうか。

英語では大方のところHome-Economicsと総称されている。ホームエコノミックスの語源はXenophone (B・C・H4344-H355)の著OeconomiousのOikonomos—Oikos (家)とnomos (管理)の結合した語—に由来する。即ち人間はその個体の維持と種の保存のためオイコスをつくり、そのための管理・法のあれこれを記述している。又、ドイツ語に関して云えば、家政学はOeotrophologieの語が用いられたことがある。Ooはギリシヤ語のOikos (house)に、そしてTrophoは「栄養」に当たる。家、家庭の栄養が家政学とは如何にもドイツらしいと思つて見る。

家政学そしてその教科名、学部名称に関して更に付け加える問題として一九六〇年代におけるアメリカの家政学の名称変更についてである。これは改名の成つたもの、移行案があるが、例えばペンシルバニア州立大学では(College of human Development)一九六六年と改名、コーネル大学においては移行検討名称として(College of human Ecology) (一九六九年)が挙げられた。いづれも家政、生活課題に対する時代や社会の要請がなせる検討であった。他に名称名を挙げるならば(Division of family resources) ウェスト・バージニア大(Family and consumer Science) (カリフォルニア大) (デイヴィス) 農学部所属、等がある。

まことに、古くから「名は体をあらわす」とあるように、家政学の名称の語源にしてもその総称化又名称変更に至る迄家政学の認識過程のなかで又家政学のこれからの展望を考えるためにも、名称の考察は効果的であった。

私は家政学の論議を担当するようになってから、毎年度講義の初期の部分で、この名称からのアプローチを扱っている。

名称の検討は又、家政学の目的や意義の理解にとって有益である。例えば、ホームエコノミックスのホームはサクソン語では本来「宿る場所」であり「安全な場所」という観念を表わしている。生活環境の近代化は「家庭」の機能をどんどん外部化、社会化してゆく。科学や技術や社会機構が「家庭」を従属的なもの、極端な云い方をすれば「家庭無用論」ともなりかねない風潮下にある。「家庭とは」の問いに対して人間がその人生、生活のなかで唯一「安んじて身を置くことのできる場」としてのホームの位置づけは、この語源、語義から説明することによって、学生の理解を誘導できる。又、名称改称のなかにでてくる「human resource」人的資源は、生活のなかでの「労働力再生産論」と結びつく。即ち、第二次世界大戦下での「戦時国民生活研究」において、「労働力」の概念は仲々に用いられない制約があった。表現として「人的資源」つまり「物的資源」に対するタームとして用いられた。家政学において、唯一と云っていい程社会科学の範疇で問題をとり上げうるのは、この「労働力再生産論」である。アメリカ家政学界で用いられる「人的資源」の名称の説明は、この労働力再生産論とリンクージュできるわけで、全く性質の異なる問題を「名称」を通して相互理解に導くことは講義の技法ではあるが、ここに書きとどめておきたいと思う。

### 一 生活学とその名称

さて、「生活学」となってからの「名称からのアプローチ」には確かとした文献や根拠は少ないものである。「生活考」II文化出版局など幾多の生活学を書いている加藤秀俊氏は生活学を称して「Study of popular culture」としていることが紹介されている。(生活学とははじめ・講談社) Popularや Popular cultureは「ともすると、日本では「大衆的」「大衆文化」と訳され易い。言葉というものは、一度用いられると、仲々にそのイメージを

変えて用いることは困難である。しかしここでいう Popular とは、一つの絶対的な学問や科学の權威にしばらくはない状態でないと「生活」という領域は研究できるものではない。という主張が込められているのだと思う。前述の「生活学ことはじめ」で文中に「生活というものは総合的なもやもやしたものですからね、学問体系になりにくいですからね。」：「家政学会」の雑誌を見ると、梅棹忠夫氏ですら学問の重任をひしひしと感ずるといっていました」（「生活学ことはじめ」二四二頁）

試みに「生活」を英語で表現すると、「life」「living」独語では「Leben」となる。しかし英語の場合、「life」は人生「living」は居住に関するタームとして印象づけられており固定することはどうもむづかしい。そもそも生活学が日本において初めて出現したのは、今和次郎氏による「生活学への空想」（今和次郎集、五 生活学 一九七一年ドメス出版）に発している。ここでの「生活学」の模索も又、いわゆる戦時国民生活研究Ⅱ大河内一男、「国民生活の理論」（一九三八年）笹山京「国民生活の構造」（一九三八年）永野順造「国民生活の分析」（一九三九年）Ⅱも、戦時下におけるトータルな人間生活の成り立ちの主張によるものであった。「生活」をどう表現し生活学をどう名称づけるか、はむしろ「生活」や「生活学」を「life」「living」としてしか表現できなかった語義の矮小性から問題をとき起してゆく必要を感ずる。それと共に「生活」「生活学」が持つ現代的、将来の課題領域の検討によって「生活」「生活学」が確立される。その意味では、まだまだ「生活学」は「生活問題学」の範疇におかれているのかも知れない。

#### 生活学—研究者の研究足跡から

ここでは生活学研究の系譜のなかから、「生活学」の構築にとつて、どうしても留意しておかなければならない点を数点挙げておきたい。

## 第一節 生活は日常性に於て問題とされなければならない

大河内一男氏は「国民生活は特にその日常性に於て問題とされなければならないであろう。生活の構造は、特にそれが庶民生活の場合に於ては日常生活の構造である。日常生活を措いて、本来何等の国民生活もあり得ないのである。国民生活はその構造においても、その歴史においても、その日常性において捉えられなければならない」「戦時社会政策論二三七頁」

この謂は勿論、生活の問題を生活の中の事件や変化、行事、風習といったものを取上げるのではない、ことを述べている訳である。しかし、氏にあってはそれはそのことに限られるのではなく戦時国民生活研究の理論的主柱としての「労働力再生産論」につながる問題意識の故であった。「このように考えると、家庭ないし世帯を中心として営まれる消費生活、その意味の家庭経済の基本部分は、世帯の中の「労働力」の再生産―世代の上での再生産と「労働力」の継受をふくめて―をめぐってくりひろげられる、と即ちいい。もちろん、個々の世帯のなかに生活する人間が、自分たちの消費生活を貫いている原則は、この「労働力」の再生産のためだなど意識しているわけではないが、結果において、それぞれの世帯の日々の消費生活を貫いている原則は、この「労働力」の再生産ということである」大河内一男、笹山京共著「家庭経済学」光生館

ではこの日常性を具体的にどのような把握したらよいか。私は講義において二人の研究者の研究態度をとり上げている。

### ―高野岩三郎―

その一は、高野岩三郎（一八七二年―一九四九年）の家計調査事始めに關してである。日本において「家計調査の基礎を築いた高野岩三郎は、「二十職工家計調査」のあと「月島調査」を手掛けている。この計画に際して次のような説明が彼によってなされている。

「調査方法としては調査地に直接調査所を設け、専任の調査担当者が成るべく常に此処に居住し、処に慣れ民衆に親しみつつ実地の調査を行ふことが得策である。…直ちに民衆に接触し、目の前まへに民衆の生活中より自然に生れ出る所の調査でなければならぬ。」(高野岩三郎伝・岩波書店 九五頁)

「彼は、内務省の役人が役場の吏員を使ってする官庁式調査では、労働者のありのままの生活実態はけっしてつかみ得ないことを知っていた。民衆に接し、民衆に慣れ親しみ、民衆の友となつて彼らと生活する中で、はじめて民衆の生ける姿をとらえることが出来る。これが彼の確信であり、社会調査の立案者としての彼の信念であった。」(同書九六頁)そして彼の指導の下における実施調査は次のようであつた。

「権田(東大副手、調査担当者)は労働者の娯楽調査に異常な情熱を示した。彼は月島にただ一軒の興業場浪花節を常演する寄席の入り口に立つて、男二人、女一人…と入場者の数を調査簿に記入するのであつた。こうして工場の定休日には男子労働者の入場が多いとか、一般に婦人の入場者は全体の一〇%にすぎぬ、などという事実を発見して…」(同上書一〇三頁、なお( )内は筆者記入)。

「このように、労働者の消費生活、娯楽生活のすみずみまで、彼の眼は克明に視察し、材料は豊富に集められて行つた。」(同上書一〇四頁)。

生活をその日常性において把える、とは述べるに易くその研究実践は極めてむつかしく困難である。受講する学生は、講師の私が、なぜ高野岩三郎のいわば「調査論」をこのように熱っぽく講義をするのか、不思議にすら思ふかも知れない。しかし、かつて教職に就く以前に研究機関において研究員として「生活問題」の諸調査に取り組んだ経験から、私は「高野岩三郎」の調査論は座右の書でもあつたのである。そして若し学生達が卒業後専門職に就き、対象者の生活把握が必要となつたとき、私のこの講義を思い起して欲しいものと念じている。



いま一人、偉大な生活学研究者の足跡を描いてみたい。わが国第一級の生活問題研究者である永野順造氏である。永野順造氏は「国民生活の分析」(一九三九年)をまとめているがその所収論文に「綴方教室」の生活構造」がある。これは当初留岡清男・城戸幡太郎が編集をしていた・雑誌『教育』(岩波書店刊)に書いたものの転載である。綴方教育は豊田正子の生活―父親はブリキ職人で絶えず貧乏に悩まされている世帯―が、その日常生活が、描かれた綴方を東京下町の職人世帯の「生活構造」として見事に分析を加えている。綴方、作文をとおしてブリキ職人の世帯の日常性を描いているのである。そして氏は「貧乏」を主観的なもの個人の責に帰するものでないことを断固明白にし社会、国の責任を問ひ糺し社会科学者、社会運動家の立場を貫かれた。

「いまや生活はただ生命を維持するにもギリギリの生活となつて来た。家計を受持つ母親としては、このどうにもならぬ生活の抜け道として、彼女を芸者にするを思いつき且主張する。母親は彼女を愛していないのだろうか。否。母親が誰よりも彼女を愛していることは劇をとおして(綴方教室は演劇上演された―筆者)、綴方を通してハッキリと認められる。責められるべきは母親でなくて、生活であり社会である。」永野順造、国民生活の分析三一―二頁

永野順造氏は又次のように述べておられる。生活問題研究者にとって、銘すべき言である。

「けだし、生活こそは人間にとって一切の問題の結論であると同時に、その前提だからである。」永野順造、或る生活改善の批判、国民生活の分析、二七五頁

## 第二節

生活とは何ぞやという設問から発することをやめよう

— 留岡清男、生活教育論 —

留岡清男氏は「生活教育論」昭和十五年、西村書店を著している。その第一篇、一、生活教育論において次のように述べている。

「われわれが屢々好んで使用する言葉でありながら、而もよく考えてみると、その概念規定が必ずしも判然しないところの言葉が少なくとも三つある。第一は生活という言葉、第二は教養という言葉、第三は文化という言葉である。…われわれは、生活とは何ぞやという設問から発足することをやめよう。むしろ、われわれは、われわれの先輩達が、如何なる角度から、また如何なる必要から、生活の問題を把握しようとしたかを、歴史的に跡づけてみなければならぬ」同上書三頁

留岡清男氏の教育実践、農民啓発の事業、児童救済の事業を通して特徴的なことは、それらが実に徹底したプラグマティズムに即したものであった。氏にあっては「生活とは何ぞや」の解釈に時間を費やすことよりも如何なる角度から、如何なる必要からそれを把握しようとしたか、を学ぶ姿勢を尊んだ。そして自らも、何のために、どうするのがよいのか、実践への課題 姿勢を整えるための「問題化」であった。従って氏は「生活問題」は今や私生活の領域から国民、社会生活の領域の問題と化していることを指摘しつつも、永野順造氏や他の戦時国民生活研究者のように、それを社会科学、経済学の学的範疇の枠に納めての理論化を試みず、むしろ「生活」をなまの姿のままに政策課題、指導課題をそこからひき出そうとした。

私達はえてして陥ち入り易いのは、いたづらに問題を抽象化し既成の科学、学問範疇のい型にはめこもうとする習性である。そのことから折角獲たところの貴重な課題資料もその鮮度を失ない挙げ句の果て、何の解釈指計も得られず仕舞の弊を繰り返すのである。その点、生活問題研究に触れた留岡清男氏の前述の指摘は極めて教訓的である。

### 第三節 豊かな生活よりも正しい生活を

#### Ⅰ E・スワロー

##### — 優境学、エコロジー —

E・スワローは女性として初めてMIT（マサチューセッツ工科大学）を卒業した女性科学者である。アメリカ家政学会生みの親であり、のちにEuthenics（優境学）Ecology（生態学）の命名者として生活者のための環境、生活科学のための運動を進めた。

「彼女は豊饒の角のもう一方の端に『より豊かな生活』と呼ばれる消費の増大と相関関係にあるさまざまな問題を見ていたのである。石炭、材木から空気、水、食物に至るまで『なにもかも、まるで二度と必要になることなどないかのような仕方です』家や地域に散乱するくずやごみは増えつづけ、処理施設がフル運転しても間に合わないほどである。人々は『さらに豊かな生活』よりは、むしろ『正しい生活』を学ばなければならぬ。」エコロジーへのはるかな旅、ダイヤモンド社、一五七〜一五八頁

E・スワローは一九一〇年、「優境学（ユーゼニックス）を出版している。優境学に関しては辞書『ファンク・アンド・ワグナル・スタンダード・ディクショナリー』では次のように記載されている。

優境学（ユーゼニックス）—個人の身体的・精神的・道徳的発達と健康および活力の維持のために、最善の外的影響と環境諸条件を確保することによって人類を發展させる科学と技術

又、スワローがMITに入学する前に在学していたパッサー大学に「優境学部」が開設された。（これはのちに閉鎖されるが夏期講座という遺産を残した）

スワローの主張は実践的であり特に教育活動を強調した。

「合衆国における人間の評価経済価値を、彼女は一人二九〇〇ドルと計算した。当時の人口は八五〇〇万人であるから、約二五〇〇億ドルの人的資源が存することになる。『これは他のすべての富の価値を凌駕します』と彼女は指摘した。『環境的諸条件に起因する死亡や疾病や非生産的な事態を予防することによって、どんなに少なく見積っても、政府や産業は一五億ドルをはるかに超える額を節約することができます。おそらくはその三〜四倍節約できるかもしれません』私たちはこの資源に投資しなくてはなりませんし、この価値ある資産を早まって清算するのではなく、改善していかなくてはなりません。と彼女は論じたのである。」同上書二六五頁

一八九二年、E・スワローは一九年にわたって育んできた科学への命名式を行った。それはボストンに於てであった。命名式の翌日の新聞に（ボストン・グローブ紙）にこうあった。

「リチャーズ夫人（スワローの婚姻名）はそれをエコロジと名づけた。」そして「それは第一級の生活の技術である。」とあった。スワローは次のように訴えている。

「正しい生活に関するこうした学問のために、私たちは新しい名前を捜してきました。：神学が宗教的生活の科学であり、生物学が物質的生命の科学であるように：これからはエコロジを私たちの日常生活の科学にしましょう。：それを、すべての応用科学のうち、健康で：幸福な生活がその上に立ち立てられるべき諸原理を教える、もっとも価値ある科学にしようではありませんか」同上書一四四頁

優境学、ユーゼニックスにしても又エコロジと名付けられた生活と科学にしても、彼女が真に「人間発展のための科学」を目指し諸科学を総合し学際科学を打ちたてようとした情熱と実践力はすばらしいものであった。世は未だ彼女の主張に対して極めて反応はにぶく且つ冷たいものであったが、一世紀を経てその先見性に改めて目を見開く思いがする。そして現在そして将来において彼女の「豊かな生活よりも正しい生活を」の主張がより輝やかしい光を放つものと信じる。

## ―手先の訓練、身体的教育の重要性

「かかどが訓練を若々しくしている時にのみ、頭脳がかかどと安定を守ることができるし、何をすべきかを言わなくとも、わずかなヒントで思い起こさせてくれます。すなわち、家事は手先の訓練で準備される仕事であり、家政は頭脳の訓練で準備される知的な仕事です。」「知性は若いころの筋肉の訓練の不足を補わないのです」エレン・H・リチャーズの生涯、家政教育社、一七六頁

エレンは教育によって人が環境を支配できるようにすることを、つまりまず体を心の命ずるままにすることができ、そして体を意志に服従させられるようにする訓練を強く熱心に主張した。そしてそれは実技の訓練のためには純学問的な勉強の一部を延期しても良いと考えた。

この手の訓練、実技の重視は実は彼女の母親の彼女に対する幼児の時から注意深い訓練によって裏つけられていたのである。

「エレンが好んだのは、屋外生活と激しい探索であったにもかかわらず、家事を無視することはなかった。十三歳になるまでにエレンは母親の指導の下で、後に自分が高く評価して、学校のカリキュラムに組み込んだ家事技術をマスターした。」「子供時代に完璧なまでに学んだ個々の家事の技術に、娘時代になってから更に家庭経営術を加えた」同上書三一頁、三六頁

E・スワローが母スワロー夫人に家事技術や家庭への愛を教えられたことは彼女の一生の活動をいろいろな側面で基礎づけた。「手先の器用さはあらゆる科学活動で最も正確を要する一つである水質分析で成功させたのである。」同上書二九頁

また、E・スワローは大学時代、自分自身の生活について書き、一週間に少なくとも一度は、母あてに長い手紙を書いた。それはバツサー大学の時代で、それは世に「バツサー日記」と呼ばれているものである。母への便りがこのように続けられたことは、彼女が幼児から薫陶を受けた母との強い絆の関係の上にこそ成り立つもので

あった。

生活学教育は単に純学問的、純理論で成り立つものではなく日常生活の観察、手技による働きかけ、生活上の実践を大切にしなければならない。その点私の講義では、E・スワローの母と娘の書翰所謂「パッサー日記」そして彼女の手技、実践、実験、実習の必要の説はまことに偉大な教材となる。E・スワローはいみじくも次のように述べていることは、特に私は講義展開で胸に刻んでいる。

「教育もあり知性もあるが、家事の経験がない女性たちを訓練し、家事サービスの評価を高める試みの失敗」  
同上書一七六頁

#### 第四章 生活学の課題

―労働力再生産からの止揚

私は家庭管理論の講義を一九六二年から担当している。当時は北海道総合経済研究所の研究員をしていたが北海道学芸大学札幌分校や帯広畜産大学への出講であった。講義ノートの作成が始った。まず家政学の原論、家庭管理学、家庭経営学に類する著書、テキストを整備した。黒川喜太郎氏、常見育男氏の著書にはいろいろ教えられるところが多かった。

「行き詰ったら歴史に学べ」とは私が尊敬していたN先生の教えである。新しい分野の勉強にはこの教えを実行した。そして更に文献蒐集はいわゆる「戦時国民生活研究」にその緒がひらかれたところの、大河内一男、籠京、永野順造氏の諸研究、諸論文、諸著作に及んだ。

この中で「生活⇨消費という生活解釈の誤り」という大河内一男氏の言葉に、それまでもやもやしていたものが一挙に吹き飛ばされた思いがしたもので、今でもそのことが鮮明な記憶となって残っている。戦後家政学界に流入されたいわゆる労働力再生産論に対して常見育男氏は次のように語っておられることから、戦時国民生活

研究や社会政策学における労働力概念は私の家庭管理論講義の理論的支柱となったのは又当然であった。

「萎靡、沈滞に類していた家庭科教育や家政研究に対し起死回生の妙薬の観があった」―常見育男、家政学―家庭管理学、一四四頁

講義の中における労働力再生産論については又別の機会にゆづつて、ここでは労働力再生産論からの止揚について触れておきたい。

資本制経済のもとにおける資本の再生産過程での労働力の位置づけ、そしてそこから労働力の再生産が理論づけられる。しかし生活学における労働力再生産論の位置づけはその部分に過ぎない。この点はマルクス経済学者の松尾均氏も指摘しているところである。まことに、歴史をつくってゆく人間そして人間生活は、むしろ労働力の再生産の再生産プロセスから止揚されたそれである。つまり労働力商品としての物神性（もの化）から解き放れた人間と人間生活こそが生活学の対象とされなければならない。この点、私の一論文を読みかえして、ずっと抱えこんでいた理論的課題であったことに気づく。

「大河内一男氏が戦時国民生活研究の理解において、労働力再生産理論を主軸とされたが、戦後においてはこの理論が家政学の分野に持ち込まれている。戦後、家政学の分野―家庭管理学、家庭経済学―では、大河内一男、笹山京氏によって労働力再生産論が主張される。大河内、笹山両氏は、家庭生活の管理、なかならず家庭経済学が一つの学問領域として成立し一つの統一的な理論体系として考えるならば「あれやこれやの家事技術上の指示や処方箋の集成ではない」として世帯における労働力再生産機能―労働力要因の保全と再生産―をもって家庭経済機能の本質とする。

「このように考えると、家庭ないし世帯を中心として営まれる消費生活、その意味の家庭経済の基本部分は、世帯の中の『労働力』の再生産―世代の上での再生産と『労働力』の継受を含めて―をめぐってくりひろげられる、といっている。もちろん、個人の世帯のなかに生活する人間が自分たちの日々の消費生活を貫いている原則

は、この『労働力』の再生産ということである。」（大河内一男、電山京共著『家庭経済学』）

「資本制経済社会という、一つの歴史的、社会的制約下にある家庭生活（小家庭経済）は、明らかにその経済法則に支配される。したがって、人間生活の、家庭生活の、超歴史的な営み（寝食を共にし育児する）のペー  
ルで覆い尽すことはできない。大河内、笹山両氏による労働力再生産の機能の抽象は、まさに資本制経済社会の  
家庭生活を科学的な学問領域の上に位置づけたものとして評価される。」

「しかし又反面じつさい、労働力の保全、培養機能をあくまで抽象的に扱うことは、労働者の生活過程を $V-G-W(A)$ と定式化することによって、その物神性をとき放たないまま資本主義の歴史性を自然律に帰結することになってしまう。これまた、資本制経済社会における家庭生活の歴史的制約、特殊性を超歴史的なものに置換する理論に導くだろう」

「 $A-G-W(A)$ の労働力再生産のプロセス（＝生活過程）の背後には、この定式で完結されないとこのころの、  
本来の人間像、人間の生活、疎外からの脱出をはかる――主体的な生活の確立――生活過程があることを知らなければならぬ。」

「松尾均氏は、論文『消費経済学批判』において、所謂、労働力再生産公式が「人間本来の生活」を肯定的に  
現わすものではなく、むしろ疎外された物神的な人間生活の表現として把握しなければならないことを指摘する。  
したがって、マルクスにとっては、 $V-G-W(A)$ というような物的形態をとった労働力の再生産公式は、そ  
れを本来的に肯定的にとらえたのではなく、人間生活が現実の資本主義の下でとる形態に注目したものであり、  
それ自体、完結的なものではない。いうなれば、疎外された物神的な人間生活の姿こそ、 $V-G-W(A)$ で表  
現されるのである。つまり、労働し、消費し、思考する人間が資本主義の下でとる現実の姿こそ $V-G-W(A)$   
であり、それ以上のもではない」

山本順子・生活問題研究の課題、「現代社会政策の課題」所収、三〇九頁―三二〇頁



少々長い引用ながら「ずっと抱えこんでいた課題」の事情がわかりただけると思う。労働力としての人間存在、人間にとって「労働」とは何か?の問いを今、むしろ問い直すことが生活学の新たな課題と考える。

労働のない人生はすべて腐敗するが、労働に魂が入っていなければ人生は窒息し

息絶えてしまう

—— アルペール・カミュ

## 本稿のむすび

私は一九六五年から本学で教鞭をとっている。女子短期大学で女子教育に当たることとなり「家政学」といういわゆる生活学の分野で講義をするようになったとき、その教育目的や講義展開の手段としての教材の探索、教授法等々、思えば新鮮な好奇心で臨んだことが今思い出されなつかしい。文中にも書いたが、「行き詰った歴史に聞け」の教えを思った。家政科に新設された家庭経済コース（そのために私は赴任した）のカリキュラムを作成すべく、私は上京し、家政系教科書出版のしにせである光生館を訪れた。光生館では全国の家政系短大、大学の「便覧」を集めておられた。私は社の一室をお借りし、全国家政系短大、大学のカリキュラムを検討した。当時、先代社長中川豊三郎氏がご健在で、家政教育のあれこれについていろいろお話しをしたものである。そのなかで、私は「生活史」「生活文化史」のカリキュラムに興味を持った。「歴史に聞く、学ぶ」の姿勢と早速この分野の検討を始め、生活史、生活文化史の書物を購入した。又、私の夫が文中の永野順造先生とお付合いがあり、先生の家を訪ねた折に、先生の論文を頂戴してきたり、「生活学とは」の対談をテープにし持ち帰ってきてくれた。このようにして「生活学」の分野に入ってきた経緯がある。

労働力再生産論を核とした「家政学原論」の講義案を作り講義を展開した。又一方で、件の生活史、生活文化史の講義を展開した。そのなかで、ある時は「女性史」を扱い、ある時は更科源蔵先生をわづらわして、生活文化史の講義をお願いした。先生はアイヌの衣、食、住の生活をとおして「生活」を、又「日本手拭」を手にされてそれが人間の生活のあれこれの場面で、どう使われていたか、など実にユニークな講義を展開された。そのなかで、私はともすれば抽象的学問の中で抽象的に扱われる「生活」が生活史、生活文化史のなかで生き生きと蘇生するさまを見る思いがしたものである。

いま、私が担当してきた「生活学」ノートから若干コンパクトにそのエッセンスを書き抜いた小論をここまじめその一を発表する訳だが、生活学とは、私が当初いろいろ悩んだようにやはりその課題は仲々むづかしいものであったと思う。

そして今、これからの課題を探るなかで、生活学の現代的課題としてどうしても反省しておかなければならぬことがあることに気づく。それは、私たちが生活をしている生活者という場合の「人間」であるが人間は当然のことながら、生きるために食べ（消費をし）そのために生活資料をえ、又生産する。しかし人間は絶対的な存在ではなく自然や地球や宇宙の中にあり人類がつくってきた社会と関わり、これも又人類がつくり伝えてきた歴史を継承し又これを未来に伝承する責任を持つ存在である。例を挙げるならば、人間は生きるために食べ、生活資料を得又生産をするわけだが、食べ（消費）をするとその残滓や排泄物を出す。さらに生活資料の採取や生産によって自然や環境や地球、宇宙にある種の影響を与えたり加えたりする。生活や生活現象の把握や生活主体のあり方は、それら問題の総体において把えられてゆかなければならない。

生活学がただ単に幸福、福祉、生活の質にとどまらぬ追求課題を目前にしていることを今強く自覚すべきと思う。

## 参考文献

- 常見 育男著 家庭科教育史 光生館  
黒川喜太郎著 家政学原論 光生館  
道 喜美代・渡辺 ミチ編 家政学 有斐閣  
大河内一男・籠山 京共著 家庭経済学 光生館  
今井 光映・松下 英夫共著 新家庭経営論 法律文化社  
永野 順造著 国民生活の分析 時潮社  
大内 兵衛・森戸 辰男・久留間 鮫造監修 高野岩三郎伝 岩波書店  
留岡 清男著 生活教育論 西村書店  
籠山 京著作集第五卷 国民生活の構造 ドメス出版  
吉武 清彦論 社会政策学の現代的課題 北海道大学図書刊行会  
大河内一男著作集 戦時社会政策論第四卷 国民生活の理論 青林書院新社  
ロバート・クラーク著・工藤 秀明訳 エコロジーへのはるかな旅 ダイヤモンド社  
キャロライン・ハント著・小木紀之・高原佑弘監訳 家政学の母 エレン・H・リチャーズの生涯 家政教育社